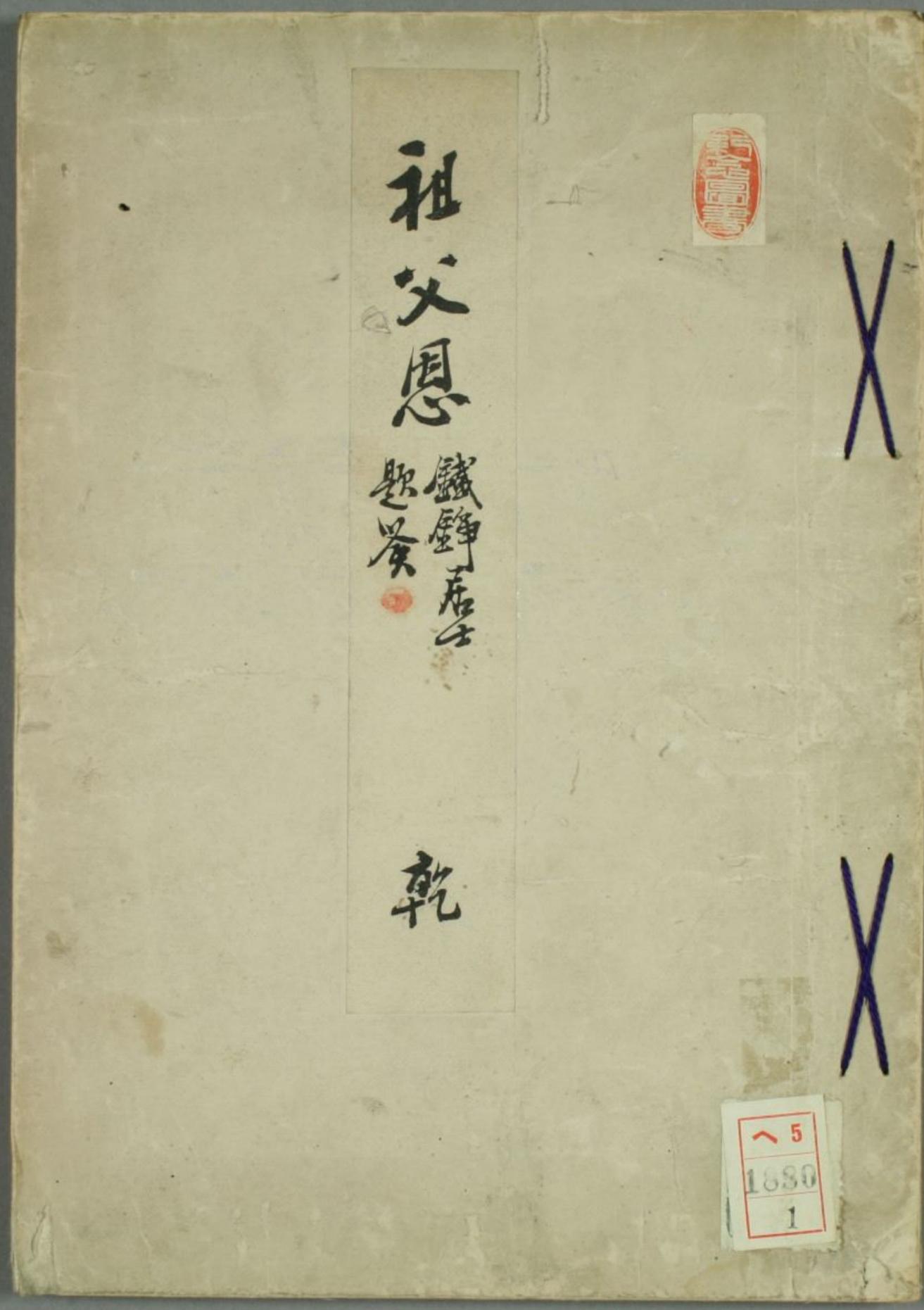


KODAK
LICENSED PRODUCT

KODAK Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



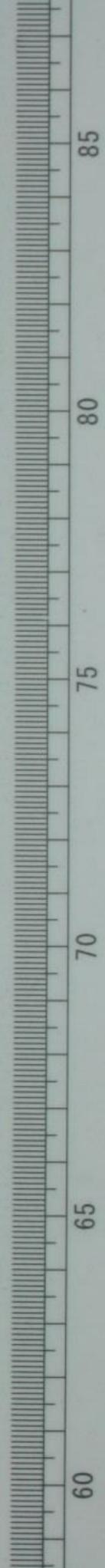
祖父恩

鐵錚居士
題

乾



5
1880
1



艾為鏡





階、景仁八歳す——して屬文十三歳のし
 徧讀諸史五世尾上梅幸十歳に——して
 孤となり十三歳のし——して祖父の大役ヲ
 侍とす時人咸謂再生菊家瑞むむ成ハ
 名を繼ぐことあり世々轉じて十歳餘を
 と茲梅壽佛乃冷照忌日ゆゆめ入るるこ
 柳溜の寄他一書我共——して此のこころ
 なむ即方ご宿のたりにてきんおら得て

手向の片りし世を向と集の故を流るるの
 好む猶ぶこ寒きを驚かざるし——して
 をしを好まぬのゆかりよふはるる
 かけ入るるあはれなる何とてんをた敷の
 故——あまあし

世の中へつこし何れもいふのあつた
 んを戀——あつたはつた——して
 あつたはつた彼十三歳のいふを——して
 譽するものあり——して

のいふもふも中々ぬと河竹其状
 丹田を詠 孝經思重のやうに
 做し乾坤の丹を分ちて何かに
 追慕り意をよ表ふ余深感心具意為供養
 香名

晋正務



其角
堂主

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

羽

為梅壽居士菩提授與外孫寺嶋清
 高野山金剛峯寺法統權大教正前長者快猛

嘉永二年己酉閏四月廿四日寂

榮松院釋菊芳梅觀居士

行年六十六

藥遠州掛川驛廣樂寺



追福翁仙

祖父の恩きく菊乃白ひけ
 ひろいさくく月の歌歌
 初瀬江外江入江の寛きこ
 とひくちうくくを家並し
 梨子棚かきのまゆいふ前庭
 水はくして水はく瓶
 けしの破さくはく比叡あり
 けしの薬けくはくすと付



永機 梅幸 春湖 幸 柳 幸 於 幸



追福翁仙の肖像
 追福翁仙の肖像

追福翁仙の肖像

追福翁仙の肖像

追福翁仙の肖像





とよの下の刃の落着の縁さうせ
 櫛屋つゝとこの旬の後さ
 郭の栴檀を啼きまの
 月のなみ程の暑いさめら
 箱棟の所のくさの檀所さ
 茵級さほん所の廣く乳
 才乃さく峰の中し只はさう
 持口のけさく程を改め
 年さく杭さる花のとも堤
 悔さくまの跡さびさつて

湖 幸 於 湖 幸 於 湖 幸 於 湖

才替て夏は色竹簀の子
 白眼之助の記ハ誰かつゝ
 早道のめさう事ハ授さく
 さえつきわらさく雪の権杖
 こねお馳走のやうさ建つて
 従てこめお授さう袖
 よみ賣つゝさるゝ戀さ昔さ
 間の歌ささく小塚原
 引越さ井戸さ自由さ虎
 常ハ釣さくさく水樂師

湖 幸 於 湖 幸 於 湖 幸 於 湖

यांचिन्त्यापि सततं परिस्मात्वरक्ता
 साचासपिच्छति जवंसजवं उर्यसक्तः
 अस्य कृतं च परितुष्टति काचदया
 धक्तां च तंच मदनं च इमां च मां च

讀音
 इयाम् चिन्तायाम् सक्तम् मायाम्
 सान्या मिच्छति जवंसजवं उर्यसक्तः
 अस्मिन् कृतं च परितुष्टति काचदया
 धक्तां च तंच मदनं च इमां च मां च

印度人蘭昌德拉者自云世尊同鄉
 生也予逢之于俄京一日為予以天竺國
 古文書世尊棄世之詩寺嶋潔氏
 以今茲當其亡祖父尾上菊五郎三十
 三回忌乞予一言予則複寫以與之
 如其讀音則以邦字記之恐失其
 真也

明治十四年五月下澣梁川居士

在品のあつ店を存するは
 海より船のあつり
 川遠き里のあつり
 卯五寸とありけし色赤紙
 海より船のあつり
 心形まはる日よる盛
 海より船のあつり

湖 於 幸 湖 於 幸 湖 於 幸 湖

追遠

梅の口吻もいふまゝに墓の土

芝翫

花咲しりばれぬまよふ心草

霞仙

何れ教の羅漢もつゝ 花竹堂

蓬外

雨もさればや木叩目入るるの雨

外橋

と船つこも亦暗する新茶の

外若

と宵照る常物なり 焼耐火

楳園

いそいでしてそや扇の筆の取

相助

珠綴りもどし八角のつゆり

素外

青梅やとにわすれぬのむすの香

香雀

昔人の赤袴すかや古柏

志瀧

幽天の空似おしふ所也土圃は

竹松

若咲のつるを音羽の滝乃色

杜若

若子しふまに各咲きし 菊の香

三外

植付し古根く強んて竹

是好

多岐くく會釈すはれ
 所の因り持てし清蓮の花
 小く出て啼音の理と照切
 一筋の通きよりの夏風ふ
 毛前や州をちりあ初竜
 青梅の供物の器りよ水
 伸よの月の蔭也ま柳
 ありよし清くさき清水
 何れもくし袴着るや文衣

尾立
 梅三郎
 音丸
 音丸
 幸水
 梅之助
 竹之郎
 新助
 可島

焼香く招りよき扇うの
 中堂り暮張し河相の
 菩提樹の梢を啼るはみ
 經寫すれりしめる再月
 花ひる知誓の舟蓮の
 寺塔りし或十世の松也
 遠く國新り扇音羽山
 年月は夏まのふり
 郭る声る川のなを以つ

谷九
 音丸
 金咲
 進三
 幸治
 繁造
 梅彦
 金治
 能進

東結ふ清水水の葉の搦ら

富中

豊州

菊のよも初夏うの尺名題

花柳

壽輔

紫陽花のわら輪の紋はりすも尻

兼之助

水琴のゆき音のしはれ雨

多見藏

繪まににまをみゆりし

高賀

唯百合の露のほろけの向牝

嘉慶齋

早しやまをきしまの唄の木

歌山

茂る何れの中の一爪の抱柏

三猿

帷子のよもをいし重

秀鶴

菊香坊

形代の屋上のゆり吹日く南

鶴童

魂ハ西方の天ニ飛ち
魄ハ東海の地ニ止り

梅壽居士の追善也

猫石と形くさくさ三十三回忌
いとけり 殊に五十三次

河竹
其水

驚破江南夢一場醒
来无处不春光可憐
水月朧明夜踈影横
斜送暗香

詠梅 確堂叟



山似柔

確壺

二山似人

六月山行記

山行記

手錄之為記

山人



水烟淡，市常門風留

都過遠，相寫器新

詩見梅，新一為明月又

黃昏

於西亭寫





抱雪懷冰四
十年

雷煊墨戲



美山晚雨
目楚深

和字子生寫
三弟澄卷



梅乾早春獨占花魁得陽氣之
 最先者小陽春後至臘月開花
 法多墨粉先浸乾其枝交女窗
 如熟勁如鐵長如箭短如戟老
 工辨 二者雙層圈法 須圓大
 圓則尖則類桃長則如杏貴含
 不貴於宜稀不宜無意
 詩錄鄭純章
 花出總論
 雲烟外史

雲烟外史



桃李莫相妬
 天女元不同
 猶餘
 霜雪態未育
 十分紅
 蘭晴



香元百卉媚不及

此逸芳

豫堂



寺嶋梅幸の

祖父純進福の

遺墨

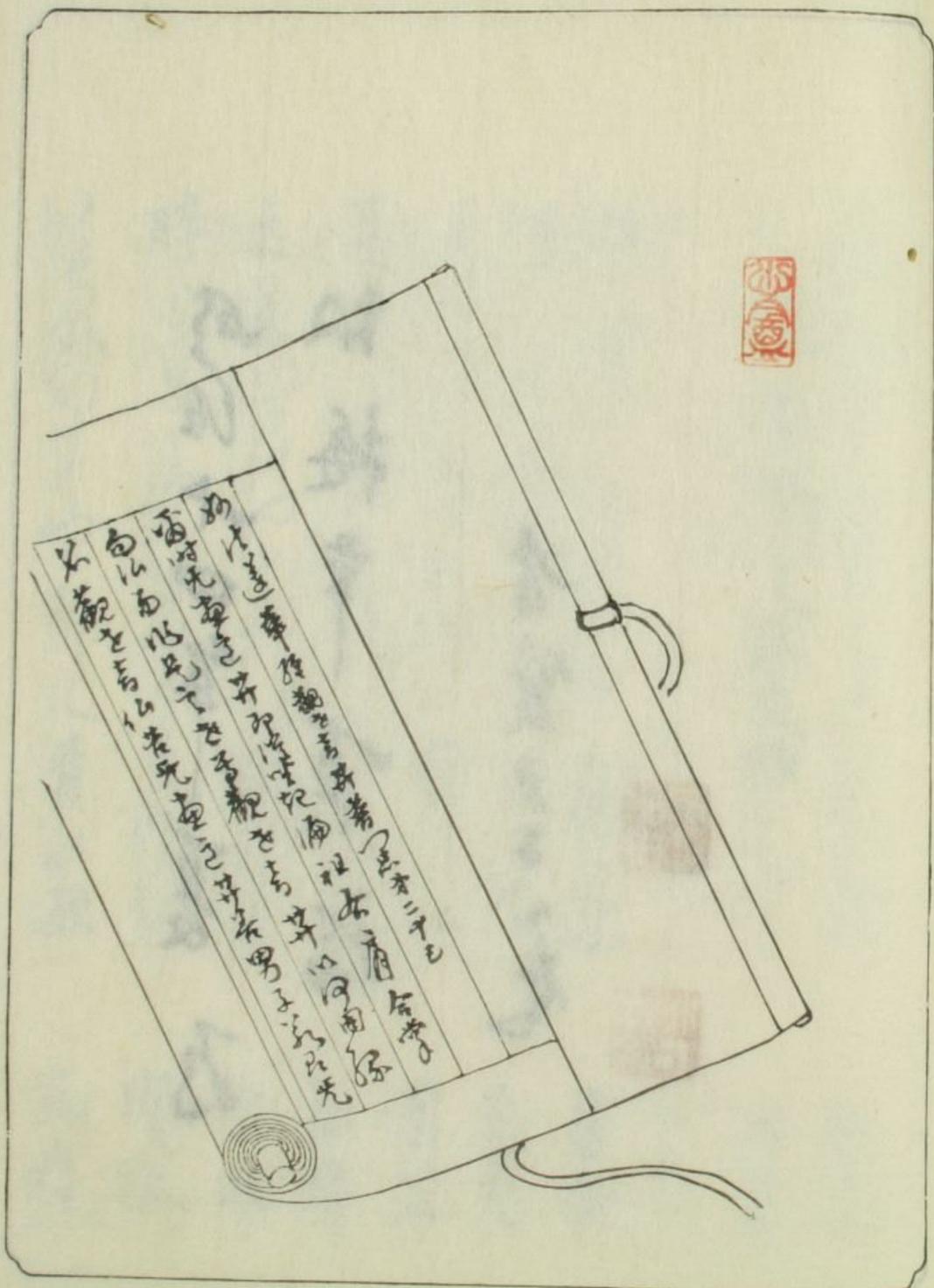
色香

花の香

枝の香

見

香の



Red seal impression.

Handwritten text on the scroll, including the characters "白心" and "父".



青一控二
Red seal impression.

明治十四年夏
梅亭真福

有友才子



追善堂 蘇文略

梅の實のこぼし生じぬ
芳しき圓居や夏の薫り
手向も三十三回の郭
夏涼しきの寺のつら
五箇の月や眼のま
時の夏は扇の多向
くら外のつら陽と青

尋香
昂也
雪笠
源輝
宇山
成雅
完略

早起のころのあけの蓮の花
 三浦一のまの豊の土圃は
 杜鵑啼の初秋の西の空
 香の各平の味整の女の都
 佐花のふるふる扇の
 花摘やまのふのふのふ
 あらまのき色色の錦の麦熟
 智の出入梅のふもや夏は立
 三浦一の色香をそとく等梅の
 その折のさみ白くして苔乃花

了つ雄
 富水
 大喬
 素水
 吳仙
 精知
 五平
 苗叟
 花叟
 採花女

追福

若芽のく柳の北の原手の中
 澄の音の遠くはみよ花の色
 訪ふ人のゆきし梅の色し梅
 大木はわきまのよの景原
 花の山をぬぐく遠の遠あり
 花の山をぬぐく遠の遠あり
 根をさくく菊の昔の昔あり

原香
 柳水
 南歌
 不角
 小窗
 文層
 徐來

浪巻

麦赤きしは田のま田のふあめ
田下 麦坊し

古筆 古筆は院佛の向の上んま

わさくわくむしーのあけま
こはーみわこるらまのま
二世 梅屋

あさけく相成りー夏木立
あまー花のけーふ
古筆 可悦

茶の色ハ松をぬりー風燭を前
夏菊乃照るまけぬちの
三のり 八百善 柏お

可く笠の佐七尋きん育祭
取ゆや松乃雲の成流ま
高熨

花し香よ櫻株くくー菊も者
菊々の香向未廣くくー及保
先連 柳美 住無忌

あひ出れいさくや梅乃こぼし種
紅の花乃の息かこー
水魚連 十足 榮中

是はの中く一木也初梅
白菜やあまらたき花の艶
光賀 一歩

こころをふかしく感得の菊の畑
煙をくんで居る扇を一羽とら
空をくぐり引音の清しき
梅の葉の切の昔のつゆの
可成りなげし扇おる品思ひあ
棋といふ字の寂しみの夏書け
虫のしやうやうの薫る菊小袖
蓮池の清き音の音れりみく
は糸をくぐりし形し 杜若
竹の子の梅を名るとよふ男根

種子

水塘

梅知

綾質

扇高亭

交来

竜吟

藍泉

只誠

希川

母夜叉の報社

野々

小三橋

二世

百無をまじり揃の上にはいり

松呂

土蜘蛛のこゑしなげこの涼風

三浦

あつちの香のこゑに菊の乾
家の風薫りしこころを
あつちの香のこゑに菊の乾
似し親乃鏡をくぐり
煙ののちり香のこゑに
香を盆をくぐり香のこゑに
——蓮の葉をくぐり水の上

豫堂

指在

華谷

孝節

柳一

素直

貴舟



短おのりお成ぬ〜伽羅袋
 夏す〜や心〜遠き水配り
 よた家ハしつ〜とま也は董字
 白蓮四只〜涼〜まの心
 は〜〜か〜旅路のり〜
 実貫つ〜む〜人〜雨の〜
 葉の〜あ〜あ〜白のり
 い〜し〜露の〜り〜夏の前

楸春
 梧他
 菟好
 於月
 桐あ
 菊鳩
 せ鴫
 松鳩

小葉の〜〜
 白蓮の〜〜
 旅路の〜〜
 雨の〜〜
 夏の前

二橋見女鏡新
 粧一曲霓裳
 衣柔觴江都

啓書



風流七竅互有
誰才調如梅郎

松齋居士



誰昔嬌客冠劍場
卅三團已忘榮恩
生句標脂粉人多少
誰似吳越做女教



槐山志武



策表傳世淨且
歷諸家

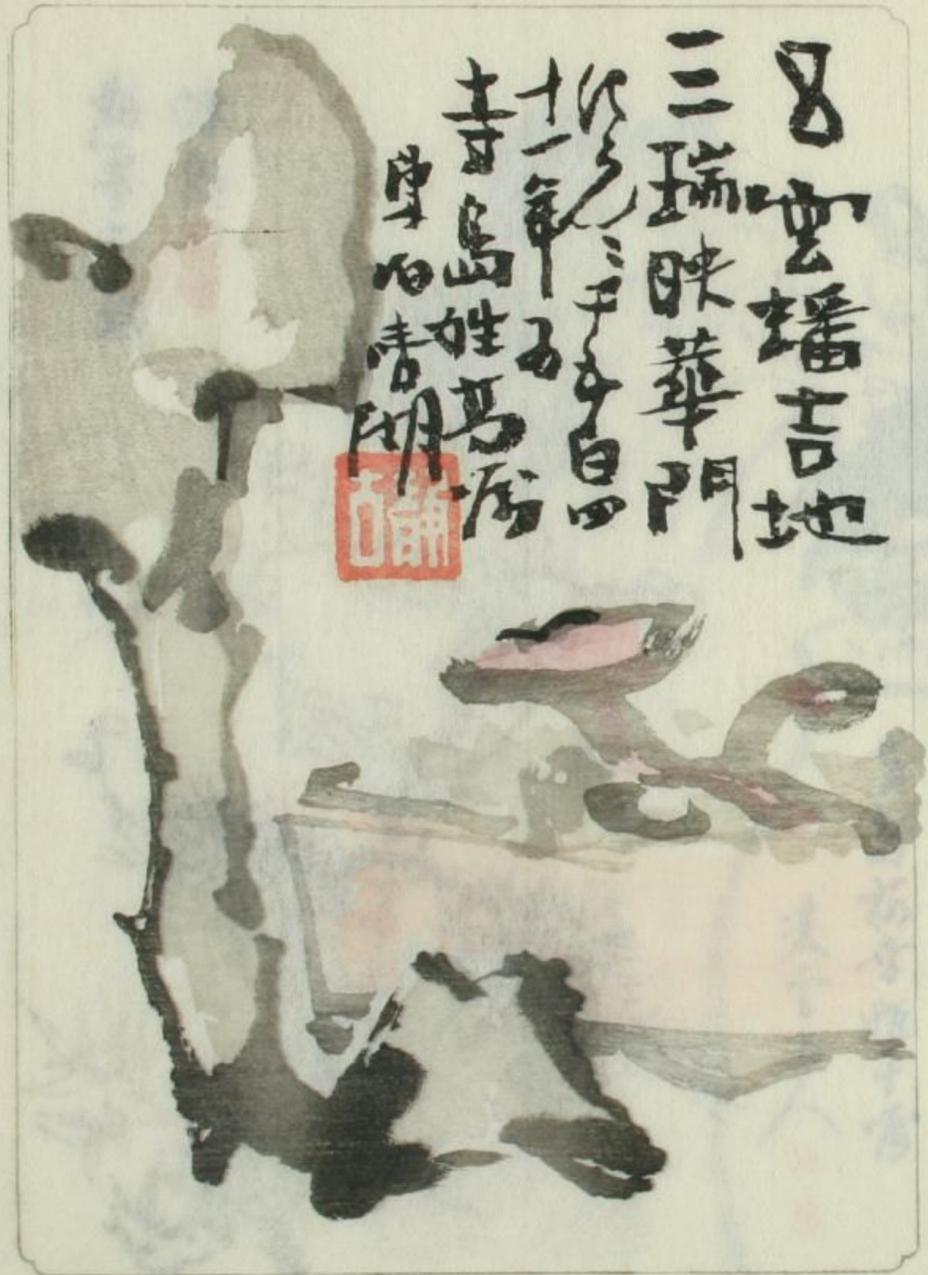


楊小儼史



辛巳清和月
西之寫於京西真





又玄瑞吉地
 三瑞映華門
 十一
 寺島姓馬房
 庚申
 吳真



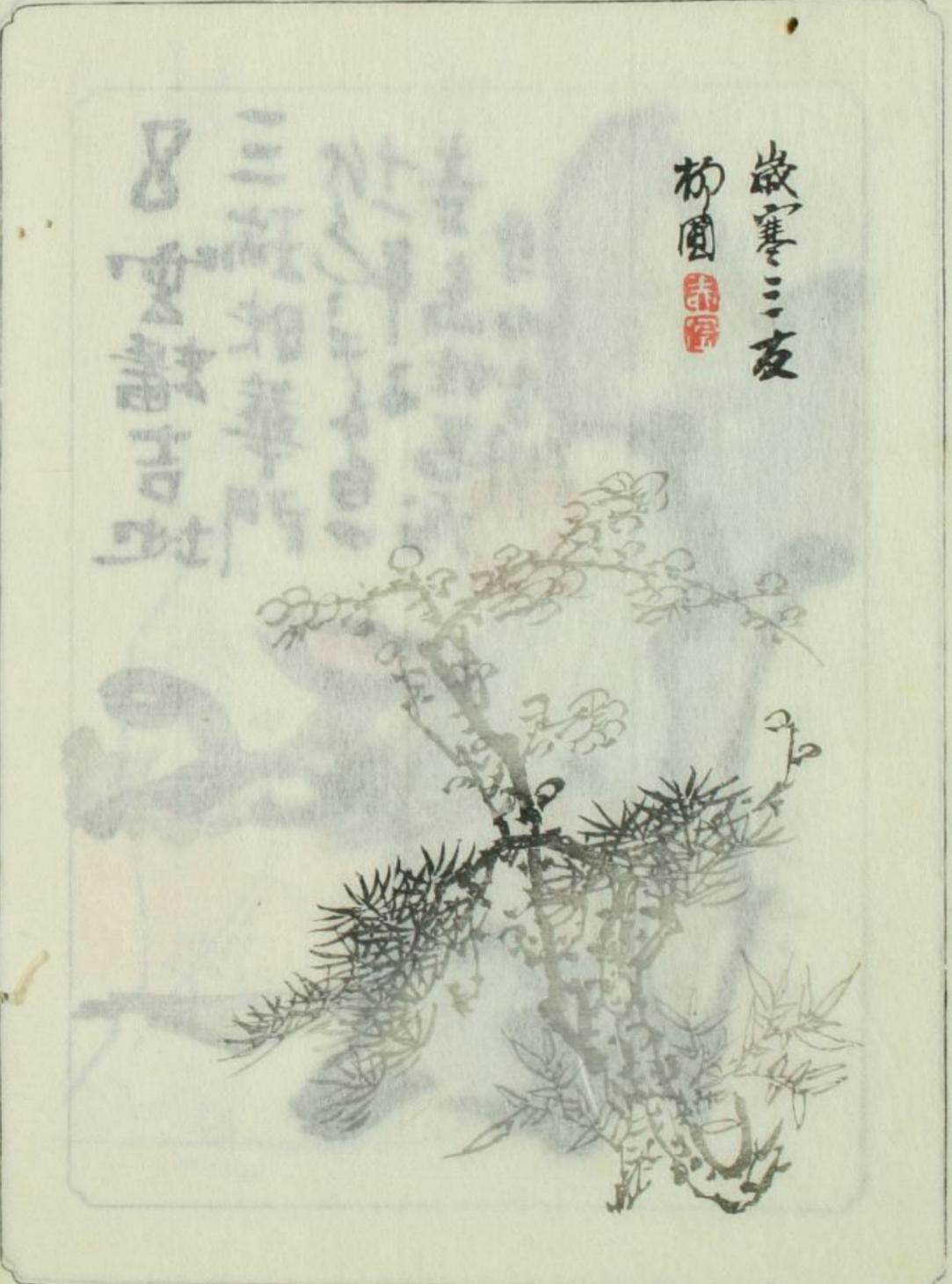
吳真
 吳真



予為松雪雅士寫

凌雪道人

芳五



歲寒三友
柳園

松竹梅
歲寒三友
柳園

也

思ふ起すも木の陰に

研く

ま



三平之とせ

むーか

友の月が我



水月

也善孔仙

ゆき即ち涼しきる扇を

この扇をもちて薫る

譲りて東嶽を以て建習て

耳のほめし厚のゆ

芳の雪も初月の斤の

一はらうきくほる裏喰

梅年

蓮州

晋江

碧尚

竜吟

巨石

葎^ウの種先引するこの稲
好むうとた^レ也る居^レ也呂
努^レる^レ方^レ中^レ厚^レを^レち
結^レの^レ中^レハ^レ何^レ所^レに^レ在^レる
軒^レの^レ東^レ梅^レ津^レ何^レも^レお^レあ^レし
し^レもの^レ清^レう^レ也^レう^レ定^レる
菽^レ入^レの^レ朝^レ月^レ祝^レふ^レて^レ氣^レ相
揚^レる^レ新^レ酒^レ中^レ狭^レき^レ扱^レ橋
城^レ下^レに^レち^レも^レは^レ小^レ用^レの^レ多^レき^レ秋
声^レう^レけ^レこ^レち^レる^レ千^レ鳥^レの^レ雨

楸春 遠池 秋暎 年 江竹 尚 石 嘖

丹^レ波^レ乃^レ有^レし^レ花^レな^レ透^レお^レし
釣^レ灯^レの^レ秋^レ乃^レ染^レよ^レ何^レも^レの
宿^レ玉^レ衆^レと^レお^レ茶^レあ^レる^レこ^レに^レ寝^レ也^レら^レま
黒^レの^レ小^レ神^レの^レ皺^レら^レめ^レこ^レの^レあ
戦^レ々^レの^レ柵^レの^レ若^レな^レ何^レも^レお^レさ^レう
流^レを^レ中^レこ^レ醒^レと^レ井^レの^レ歌
結^レの^レ後^レと^レは^レお^レし^レぬ^レこ^レし
の^レれ^レと^レ薬^レを^レ甘^レさ^レし^レぬ^レ留
生^レ酔^レの^レ所^レに^レう^レる^レ也^レら
初^レ雪^レぬ^レり^レ霜^レの^レ後^レら

他 年 州 江 吟 石 楸 池

いとしの千鱈運こまの舟さく
きしの葬具こころを走せ
ちたつて退入退この暗い月
泣きぬ 了り板の心
柴栗を湯漬の菜つと暗
草鞋くま したて十年
ゆきゆきの石のまをわらわし
数ある屋大工を職人として
居たつて遠き昔の花のこころ
空那つと したて十年

春 年 竹 江 尚 吹 石 地 春 園

楳壽翁の信より
梅幸君の墓より

祖父の仙と羅漢く先新其心
涼し 音羽の庵りみり
若菜れをくしを柏外
何とあてたはれ掛ふ卯月
日の落して長きも家のまあり
楳のなつと したて十年

魯文
七十六
柳子
木室
春喬
青蛾
竹溪

其引

四五七八所内は竹

詢亮高

ゆるぎし初ぬ雲内又出たり

施齋

染まらぬ山と成りう熟る

梨塘

松より抱ゆ身如松の厚

静和

冷しく松の葉の。思ふに

金羅

この時啼きしる。秋の月

空狂

園へををの白らぬ梅の世

鶴丸

あかしの月やと寒川のあ

酔甫

鶯は乃ち更なる。もこの一感ふ

素石

くはる高音の何のなほ

西京

芥舎

敷公の阿波の杜のり

名五也

和子を

多の者や出くらすまの庭のあ

徂康

くはる啼はりの川を

翠西

まはるしそのまを存きし月影

甫

の春のく踏ぬ影よ小松賣

静所

お葉し木をのすく草乃更

羊山

待つる空しつゝ心 郵
一口の新茶うゝ夏心
おろしし椿を花の柳下
花のさく雨のふる也自田川
郵よりう路の足元をのり

秋田 喰也
兵部 字志
裁修 雪原
甲斐 竹良
駿河 十湖

旅しつらよまのまを夜の虫
ゆゑいなき夜半の右海舟
舟のちて居るかすの又も
つゝあの中へ紫内舟の舟

正義
春仁
謝徳
金蘭

たむけはる夏窓の菊のうらと
昔の人み しのぶの歌

吉野
正義
雄

行燈の灯は梅雨のま忌日
おろしし新茶の中へ青
体と心の新しむる
さす河川灯のあし旅亭
水無りの峰の雲か
裸灯のあきあき

子英
不及
山
崔子
照兮
素朴

あまの玉の珠のくちかき若年のあ
けのうらやうのうらやうのうら
んをうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら

大年
お存
晩香
うらやう

白葉の上の芳のうらやうの影
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら

芳洲
東名
波声
あけのうら
春夏

あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら

花号
曙を
林華
あけのうら

あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら
あけのうらやうのうらやうのうら

及言
羊仙
可水
厂峰
芒雪
地生

遠山乃旧友を
結縁のこころ

花、酔くとし畑の目をめく堤小
窓控し涼むよな四又考
物喫嗜の苦恨のれく白芥子
あはらりし四七日のあまは五十年
南啼如錦の、くろく田川、
古
是佛
秀民
素阿
古朴
香以

梅壽翁の本来清浄心を記す
梅幸居り、照る

夏菊やその花ひらり譲るの
素阿
空阿弥

糖漿朝。悪毒
逐喫は多遊戯
金鑄出飛揚
翠羽追

幸と初古
演劇除暈
梅幸居り
田阿



可



為梅表佛出物

大雲行指蓮華表之寺守家



梵音海潮音

勝彼世間音

汲とりをま向ふ
ありま
潔乃花

厚友梅意



古くも旅の果ていつか舟の
上のもやし砲強を言わぬし
物をとら流石松子 又 是絶ぬよ
三瓶の職り榮光也祖父梅幸翁と
旅の物をやる旅のうきもの赴くハ
三十餘年一の知り 我いしけ
ぬきし聲と 御もなほを
ひつち退善の二智せしつこのつ

横の へし へし へし へし へし へし
晋子翁のた摘まけ 父の徳と
深遠なるにハぬきし 声と 御もなほ
と日と今又語ぬる

四歩の 廣樂寺

五廿 梅幸識



明治十卯年五月

以一編做室晉齋之筆意

其角堂書

東京味田河江川乃

